

ヤスパースの仏陀論における「大乘非仏説」傾向について

嶋田毅寛

実存哲学で著名である独の哲学者K・ヤスパース(Karl Jaspers, 1883-1969)は第二次大戦後に「世界哲学」を企画して、洋の東西を問わず人類に教えを説く哲学者と自らが想定した人物を取り上げる『大哲学者たち』⁽¹⁾を公刊し、その内に「仏陀論」と「龍樹論」も含めている。ヤスパースがその「仏陀論」を執筆する過程で、参考にした經典の独訳や仏教研究書等の影響を受けて、いわゆる「大乘非仏説」傾向を感じさせるようになっていくとの印象を筆者は持った。本論稿は大哲学者たちの一人「人間仏陀」というような形の彼の「仏陀論」について、筆者がこれま

で見てきた印象を考察してみたものである。ヤスパース自身が当時および以前の西洋における仏教学の動向をどこまで承知していたかは定かではないものの、彼が「仏陀論」および「龍樹論」を執筆するうえで著名なインド・仏教学者たちの独訳經典または仏教書を参考文献にしていたことは明らかであり、それらを取り上げるうえでの彼の仏教に対する姿勢の一端を本研究にて解明してみる。

一、十九世紀末における仏教学および 大乘非仏説的傾向について

現代的意味における「仏教学」は実証主義の影響を受けて西洋において発生し、それはインド学における一部門としての位置づけであった。当初「仏教学」は文献の実証研究に基づいて、信仰対象の「超越的人物仏陀」ではなく、後に「仏教」として展開することになる宗教の開祖である「歴史上人物仏陀」に対する研究であった。というのもインドから中国、朝鮮半島を経由して漢訳された経典が中心となって仏教を伝達された我が国とは異なり、西洋諸国はインドから経典を直接伝達されたため、初期仏教の成立以前の「人間仏陀」をより直接的に記してある経典に触れる機会に恵まれていたからである。しかしこの伝達について、我が国を含むインド以東への布教を目的する伝達とは異なり、十九世

紀以降の西洋諸国へはアジアへの植民・支配を目的とする調査から、後には研究のための仏教經典の伝達へと推移していった。またこの当時の西洋におけるかつて支配的であったキリスト教に対する批判、または東方における神秘的な宗教に対する憧憬等といったその時代を反映しての仏教に対する関心といった側面もある。しかし何より初期仏教が成立する以前の「人間仏陀」に対する関心が西洋で高かったのは、彼の説く思想が哲学であると捉えられ、奇跡や彼岸的存在を否定したことから、当時の西洋における科学主義と両立可能であったためとも言われている。⁽²⁾

例えば林によると、「十九世紀後半のヨーロッパの仏教学者、さらには仏教信奉者は、ブツダを憧憬して、人生の師として、生きる模範として仰いだ⁽³⁾」と言うが、それは当時の西洋の知識人たちが仏陀に改革者、詩人、革命家といった科学とも両立できそうな理想化されたイメージ

を抱いていたからだという。「要するにヨーロッパ人の仏教観の中心には、歴史上に生きた人間ブツダがいた……信仰対象から離れて、歴史的に存在した理想的な人間ブツダ⁽⁴⁾のイメージであったという。そしてそのようなイメージを作り上げた先駆者が仏のP・ビュルヌフであり、独のH・オルデンベルク、そして英のT・リスIIディービスであった。ビュルヌフはパーリ語およびサンスクリットの両方を修めていたが、後の二者はともにパーリ語経典・文献を特に重視していた。渡辺によるとそれは「歴史的な仏陀の真説を伝えるもので、これによって仏教の最古の実態を明らかにすることができる」と西洋の仏教学において考えられていたからである⁽⁵⁾。確かにバラモン教の聖典を記している雅語であるサンスクリットに比べて、一説には仏陀がそれで説法したという民衆語であるパーリ語により記された書物の方が、歴史上の仏陀の実像を示しているというのには一理ある。そのた

め当時の西洋のインド・仏教学者たちはパーリ語原典の研究において多大な功績を残す一方で、サンスクリットの他、チベット語、漢訳の大乘経典を「人間仏陀」の実像を歪曲する後世の創作物であるとして軽視する傾向が見られた。こうして西洋における「大乘非仏説」が発生したと言われている。十九世紀後半に真宗大谷派を代表して南条文雄と笠原研寿の二人がイギリスに留学した際、リスIIディービスからはパーリ語の経典研究をするよう強く勧められた他、『阿弥陀経』を非仏説と断言する宗教学者マックス・ミュラーからは浄土信仰を捨てて仏陀本人へと回帰するよう勧められたというエピソードも残っている⁽⁶⁾。またオルデンベルクも著作『仏陀』において、「従来早くから知られているネパール所伝の経典、例えば上にあげた『ラリタ・ヴィスタラ』、或いは『ディヴィヤ・アヴァダーナ』、あるいは『マハーヴァスツ』などの如きと比較すれば、パーリ所伝のものの方が確かに優れて

いる⁽⁷⁾」とまで断言している。

しかしこのようなパーリ語偏重の傾向に対して、その当時から批判がなかったわけではない。先に名を挙げた南条も当時、「大乘非仏説の論の如きは古来珍しからぬ事なれば予と笠原とは別に驚きもせず宗旨上に於いては毫も信を動かすことなかりし⁽⁸⁾」と述べており、ミュラーの忠告に従うつもりはないことを示し、「文学上の師にして宗教上の師ではない⁽⁹⁾」とリス・デービスやミュラーの忠告を割り切っている。二十世紀に入るとパーリ語偏重に対して公然と批判するものが現れ、H・ベックもその一人である。彼は自身の著作『仏教』において大乘仏教が初期仏教の墮落形態であるかの評に対して、「マハーヤーナの教理は、すでに根本仏教のなかに完全に存在していた萌芽から発展した⁽¹⁰⁾ものであるとし、むしろそのような大乘の教理が小乗仏教（ヒナヤーナ、南方・上座部仏教）においては退化してしまったと指摘している。彼は『仏教』に

において「伝説上の仏陀⁽¹¹⁾」と「歴史上の仏陀⁽¹²⁾」とに分け、それらの内の「成道物語」等の伝説的要素に関してはサンスクリットの『ラリタ・ヴィスタラ』を、そして仏陀の入滅のように歴史的事実についてはパーリ語の『涅槃経』等に基づいて執筆しており、必ずしもパーリ語偏重にもまたその反動としてサンスクリット偏重にも与しないバランスの取れた学問的態度を取っている。それでもほぼ同時期である宗教学者のF・ハイラーの著作『仏教的沈潜⁽¹³⁾』によると、内容的には『涅槃経』や『沙門果経』等のパーリ語の引用が多く、また自らが規定する「瞑想の宗教」である仏教に対して、大乘仏教はキリスト教と同様に「祈りの宗教」であると自らの想定する「仏教」から区別している⁽¹⁴⁾うえに、本文中では直接パーリ語を引用しているものの巻末においてそれに対するサンスクリットの対照表まで載せており、パーリ語・初期仏教偏重の根強さが見られる。

本章においてはヤスパースの哲学および、これまで挙げてきたインド・仏教学者たちによる文献を用いた、彼による「仏陀論」の概略を述べてみる。

二、ヤスパースの哲学と「仏陀論」における おおまかな内容

まずヤスパースの哲学的姿勢として、主著である『哲学』から一貫していることは「絶対化（ドグマ化）」批判である。彼はある特定の人間や存在等に対する絶対化および神格化を徹底的に排斥し、そのため『大哲学者たち』においてプラトンや老子はおろか、仏陀の他にイエスもあくまで「哲学の教師」の位置づけである。また特定の信仰や思想、世界観等に対する絶対化に対しても批判しており、キリスト教の他に自然科学、それからアリストテレスやヘーゲルといった体系的哲学に対しても、それらは我が物化

(Aneignung) されるべきものとして、それらの絶対化に批判の目を向けている。そしてそのような特定の信仰や世界観に対しては、それらを絶対化することなく超越者 (Transzendenz) の暗号 (Chiffre) と捉えて自らに「我が物化」する一方で、信心といった信仰の「主観面」と宗教儀礼や神の像や戒律のような信仰の「客観面」とを包括する〈包括者 (das Umgreifende)〉に対する〈哲学的信仰 (der philosophische Glaube)〉と「¹⁵⁾ 彼自身の宗教哲学を提唱する。ヤスパースは『大哲学者たち』における仏陀の説く解脱 (Erlösung) および救済の道 (Heilsweg) も、仏陀による哲学的信仰と捉えており、その後に世界宗教となる「仏教」とは区別している。

それではヤスパースによる「仏陀論」についての概略を示してみる。当然ながら彼は哲学者であって仏教学者ではないので、彼の仏教的見地は自身の参照したインド・仏教学者たちの独訳した経典および仏教書、彼らによる仏教研究

書に負っている。經典に関してはパーリ語および南伝仏教經典の独訳が中心であり、それから仏教研究書としてオルデンベルクの『仏陀』、ベックの『仏教』、ピッシェルの『仏陀の生と生涯』⁽¹⁶⁾、ハイラーの『仏教的沈潜』等の書名が見られる。

「仏陀論」の最初は仏陀の「伝記 (Erzählung des Lebens)」⁽¹⁷⁾であるが、パーリ語經典中心を反映してか、歴史上の人物「仏陀」の生涯について記述されている。シャカ族の王子として生を受け、人生の苦から抜け出すため肉体的苦行ではなく、中道の瞑想により悟りを開いて、その後生涯説法を行い、死に臨んで弟子たちに常に怠りなく法(ダンマ、ダルマ)に従って生きよと遺言したと、一般的に言い伝えられている通りに描かれている。そしてそこには菩薩が天上から降臨して母であるマヤー妃に受胎したこと、悟りへと至る前に悪魔たちが仏陀の悟りを妨害したこと、仏陀が悟りを開いたもののそれを民衆に説法することを躊躇った際に梵天(ブラフマン)の説得

により説法を決心したこと(梵天勸請)等のおよそ伝説的な描写が一切見られない。

次に仏陀が悟りへと至った「教法と瞑想 (Lehre und Meditation)」⁽¹⁸⁾についてであるが、仏陀が瞑想でもって悟りを開くためには八正道に見られるような倫理的行為である戒律をも重視していることに着目し、ヤスパースはここに包括者を見出している⁽¹⁹⁾。というのも既に見た通り彼の言う〈哲学的信仰〉とは信仰の主観面と客観面を包括している包括者に対する信仰であるため、〈瞑想〉という仏教における主観面と〈戒律〉というその客観面のどちらか一方が基礎となるのではなく、両者が同時に相並んで働いていることが説かれていからである。そしてこの「瞑想と倫理的行為との一致」について実際に彼はベックおよびハイラーの実名を挙げている⁽²⁰⁾。

その次は「仏陀の」説かれた教え (Die ausgesagte Lehre)⁽²¹⁾に関して苦集滅道で示される〈四聖諦〉、無明に始まり苦へと結実する因果形式である

〈十二因縁〉、それから解脱していく先の〈涅槃〉等の仏教の根本教義が説かれている。それだけでは取り立てて他の仏教概論等と何ら変わらなないように見える。しかし我 (Selbst) の否定に関してはヤスパース自身の哲学に基づく仏教観が反映している。というのも上記の四聖諦や十二因縁に基づけば、最終的に執着すべき我はないと悟ることと解脱に達するというのが通説的な見解であるはずが、彼はこの「我の否定」を「本来的自我 (eigentliches Selbst) ではない我の否定」と解している。つまりこのような「執着に囚われている我」ではなく、「正しい覚知による本来の我」に達することこそが解脱というのであり、このような「本来的自我」というところにヤスパース自身の「実存 (Existenz)」哲学が見られる。そしてそのような本来的自我に到達した仏陀には人格化されたイメージは全くない。それはあくまで救いの道を説かれる、人類の哲学の教師「人間仏陀」である。

そして仏陀における「新しきものについての問い (Die Frage nach dem Neuen)」とはまず「仏陀」という比類なき悟りを得た人間についてであり、幼少のころ仙人によって世界を統一する偉大な王か世界を救う仏陀のどちらかになると占われたという伝説が述べられている。そして「人格」に関して、それは偉大であると同時に未来の仏陀の模範となる個人を越えた存在とも述べられている。そして仏陀在世当時の階級制度や神々といった権威に対して徹底的に反抗したと述べられる彼の「断固たる態度」に関して問われ、最後に仏陀は多くの者にそれぞれに合った説法をして智慧による救いを説き、あらゆる個人に対して比喩・箴言・詩を用いてされたことにより、後に仏陀の教えから僧団が起り世界宗教へと発展していったという「伝導」の経緯がヤスパースによって問われている。

ヤスパースにより述べられた仏陀の教えの「影響史 (Wirkungsgeschichte)」⁽²³⁾としてもとりわけ特

別なことのあるわけではない。インドで起こった仏教がアショーカ王のインド統一とともにその保護を受けて広まったものの、やがてバラモン教からヒンドゥー教が起り、その広まりとともに仏教がインド本国で一旦は滅んだが、やがて東南アジア、中国、モンゴル、朝鮮、日本へと広まっていたこと等は歴史の書物で見られる通りである。ただ仏陀の説かれた「救いの道」が「仏教」という世界宗教へと発展したことに關して、多・少・の・批・判・的・な・ニ・ユ・ア・ン・ス・がヤスパースにより込められている。次章においても触れるが、他の仏教学者たちも述べているように、仏陀の教えにより忠実な小乗（南伝、上座部）仏教に比べて大乘（北伝、大衆部）仏教は墮落した形態との記述がある。これに関してもヤスパースが一概に他の仏教学者たちとともに大乘仏教批判に与しているとは言えないのだが、仏陀の教えという「哲学的信仰」が「仏陀信仰 (Glaube an Buddha)」と化してしまつたと述べている点

について、私見ではハイラーの見解に近いものが見られ、この点についても次章において改めて述べよう。ただそのように大乘・小乗を含む世界宗教として発展したことについては、宗教弾圧や宗教対立等の暴力を伴わなかつたとしてヤスパースもその非暴力的な態度を評価している。

最終章である「仏陀と仏教が我々（西洋人）にとって何を意味するか (Was bedeuten uns Buddha und der Buddhismus?)」⁽²⁴⁾であるが、先ずヤスパースは仏陀の教えが西洋人にとって、思想として理解できてもそれを実修しない限り、その理解には限界があるとして、西洋人とアジア人との間の「隔たり (die Ferne)」を主張する。ただし「限界がある」といつても「不可能」ではなく、ともに同じ人間であることまで否定する必要はないという。例えば仏陀の瞑想に類するものが、キリスト教の神秘主義等においても見られるとするも、それぞれの側でのその位置づけが異なっており、その相当するものが一方では端緒

であっても、他方では全体であったりするようなことがありうるという。オルデンベルクやハイラーによる「キリスト教以外の」他の宗教において祈り (Gebet) に当たるものが仏教では沈潜 (Versenkung) である⁽²⁵⁾との言説を彷彿させる。前者が永遠の命を得るための超越的存在に對しての「祈り」であるなら、後者の瞑想による「沈潜」で悟った、あらゆる存在は無自性であるという智そのものが救いであるというように。このような差異は人間の存在の在り方に端を発するのであり、ヤスパースはそこに西洋人とアジア人との「隔たり」を見出している。

次章ではこのようなヤスパースの「仏陀論」において筆者が見出した「大乘非仏説」的傾向および、ヤスパースが参照したであろう仏教学者たちの著作による影響について記述することにした。

三、ヤスパース仏陀論において見られる仏教

学者の影響と大乘非仏説的傾向について

ヤスパースの哲学的姿勢および著作『大哲学者たち』の執筆の経緯からすれば、その中の「仏陀論」と大乘非仏説との間にはいくつかの点で意見の一致が見られてもそれは決して的外れなことではない。その主な理由は、当然ながらヤスパースが「仏陀論」を執筆するうえで参照した、オルデンベルクやハイラー等の大乘非仏説的傾向を持った仏教学者の著作からの影響である。既に述べたように参考文献に挙げられている、ドイツの仏教学の大家であるオルデンベルクの『仏陀』においてパーリ語經典の優越性が説かれている。

セイロンの人々は大陸から渡来したこの經典の言葉、即ちパーリを聖語 (heilige Sprache) として尊び、仏陀も過去世の諸仏もことごとくこの言葉を使ったかに考えていた。そ

の後、このセイロン島にも島の方言で書いた宗教上の典籍が現れるに至り、仏教に新しい古譚や思弁の侵入する門戸を開いたけれども、これと同時にこれがまたパーリ經典とこのような異分子との混合を有効に防止する放水門となつたのである。⁽²⁶⁾

上記においてオルデンベルクは、インドから持ち込まれたパーリ語がスリランカ仏教において、仏陀が使用した言語と捉えられ、その存在がパーリ經典とそれ以外の区別を果たす役割を担つたとし、パーリ經典において仏陀の生涯に関する資料が純粹に保たれていると述べている。また彼は「例えば教団法に關したパーリ經典の律藏（ヴィナヤ・ピタカ）において構成の根源性（Ursprünglichkeit）が明らかである」⁽²⁷⁾とも述べ、サンスクリットで書かれた『ラリタ・ヴィスタラ』等に比べてパーリ語の方が古く素朴な形式を保っていることを強調している。

このようなパーリ語偏重がヤスパースの「仏陀論」にもある程度見られることは、前章でも触れている。「仏陀論」の冒頭において、「入手しうる伝説を記しとどめている文章は、大部分パーリ經典である」⁽²⁸⁾との記述がある。ヤスパースの「仏陀論」においてサンスクリットで記述された『ラリタ・ヴィスタラ』への批判に関する言及は見られないものの、「仏陀の実在は明らかに伝説的なものや後世の付加であると証明できるものを取り去つて、批判的に得られるものでなければならぬ」⁽²⁹⁾との主張は、「仏陀とその生涯について果たして歴史と言いつるべきものが伝わっているかどうか、伝わっているとすればどの程度に伝わっているか、またどの程度に事実が詩と神話とで隠されているか、⁽³⁰⁾という問題の裁定へはパーリ伝統の調査のみが導く」というオルデンベルクの発言と軌を一にするものである。もちろんこれは人間の神格化を拒否する、という、ヤスパースの哲学における姿勢に基

づくものである。仏陀の神格化になるような仏陀・伝説ではなく、より古いパーリ經典における仏陀の生涯に基づいて「人間仏陀」の実相に迫ろうというオルデンベルクの姿勢は、まさにヤスパースの取るところの「仏陀論」である。

さらにヤスパースの哲学では「存在意識の変革 (Verwandlung des Seinsbewusstseins)」が重視されている。前章でも見た通り、解脱を「真実の覚知」とするヤスパースにとつて、仏陀の瞑想とは自らの苦についての無知から脱する意識変革に他ならない。だからたびたび西欧でも仏教に対する誤解あるいは蔑みとも見られる、ニヒリズムやペシミズム、現実から遊離する神秘主義等との見解をヤスパースは仏教に対して取らない。「仏陀論」において散見される〈沈潜〉とは八正道における「正定」の他、涅槃に達するための心的状態である禅定・三昧等をも示しているが、筆者はこれについてハイラーの『仏教的沈潜』を連想する。ハイラーも自らの同著

作において、仏陀の瞑想での心的状態（沈潜）が薬物による陶酔や忘我的な無意識状態ではなく、徹底的な意識状態であることを示している。

これに反して仏教的沈潜はそのような「超自然的」な、魔術的、催眠的あるいはエクスタシー状態ではなく、最高の意識性と注意深さを目指している。「仏陀の弟子たちは常に注意深い」と繰り返し法句経は強調する。十分に目覚めた状態においてのみ救いの「認識」は最高の「分別」を手にしうる。しかし「目に見える」涅槃（第四の禅定からそれへと阿羅漢が没頭する）もいかなる興奮でもトランスでもなく、完全な純潔と統一の精神的状態である。³¹⁾

上記の『仏教的沈潜』での記述に類似して、ヤスパースも「瞑想の諸段階は、例えば麻酔剤やアヘンによるような、興奮・エクスタシー・

異常な状態の享悦ではなく、最も明らかな認識であり……何物も無意識の内に潜在せしめず」と主張している。そこには超越神と合一するが如き神秘主義のような忘我状態は見られず、あくまで瞑想による沈潜は各自が実修すべきものであり、「仏陀論」におけるヤスパースの言う「西欧人とアジア人との隔たり」を思い起こさせるものがある。

しかし一方でヤスパースはベックの『仏教』からもかなりの影響を受けている。特にベックはかつて『世界観の心理学』⁽³³⁾において引用されていたこともあり、決して「仏陀論」の執筆のためだけにヤスパースが資料としていたわけではなく、関心の内容が以前の心理学時代と異なるとはいえ、ハイラーを除く他のインド・仏教学者とは関わっている期間に差がある。前章でも触れたようにベックは当時のドイツ仏教学の中では他と異なり、パ・リ語偏重に對して早くから批判をしており、「人間仏陀」ではなく「仏

教の開祖」という視点に基づき、パ・リ語とサンスクリットの両経典を公平に扱っている姿勢が見られる。「歴史上の仏陀」と「伝説上の仏陀」を区別したことにそれが良く示されている。先述した、「大乘仏教の教理は初期仏教に既に含まれていて、小乗仏教ではそれが退化していった」との主張からは、大乘仏教が仏陀の教えに反しておらず、仏陀は「大乘仏教の開祖」でもあることを知らしめてくれる。それに応じるかのようになおさらにされた仏陀のいくつかの萌芽……大乘仏教においては展開されている」とし、前者に比べて後者は民衆の宗教的欲求の充足や高度の思弁哲学を産み出している等、決して大乘仏教を劣っているものとは見ていない。先の「仏陀の救いの道が仏陀信仰と化した」との言説は、後の「(大乘) 仏教」が自らの言う「仏陀の哲学的信仰」からは異なってしまったと多少批判的に聞こえる、ハイラーが大乘仏教をへ沈潜」で

はなく〈祈り〉の宗教と指摘しているように。それと同時に「仏陀の教え」から分かれた新たな思弁哲学・形而上学への展開であるとヤスパースが見ていたと捉えることも可能である。この場合ヤスパースは「仏陀の教え」と「仏教」とを分け、それぞれを違った意味で高く評価していたと捉えるべきである。このような主張が大乘非仏説とは対極に立つものであることは言うまでもない。ヤスパースの哲学姿勢からすると、「仏陀の教え」も「仏教」もともに、「我が物」とすべき「超越者の暗号」であって、どちらも絶対化や神格化はすべきではないし、優劣もつけられない。中村によると、「大乘仏教は『仏教』であるかもしれないが、『ブツダの教え』とは非常に異なつたもの」と西洋の仏教学者たちが捉えるも、大乘仏教は自らの存在理由を仏陀の權威に求めているという。⁽³⁶⁾ 大乘仏教が「仏陀の教え」から逸脱しているとしても、初期仏教とは別物として評価することは可能であり、大乘仏教が

劣っているとする理由にはならないであろう。

これまで見てきたことから分かったことは、①ヤスパースの「仏陀論」における「大乘非仏説」傾向は彼の参考にした文献および独訳パーリ經典に拠っている、②彼自身の哲学姿勢からも「大乘非仏説」に通じるものがある、③大乘仏教そのものに対して批判的であるわけではなく、「仏陀の教え」と「大乘仏教」とは区別して両者に優劣をつけていない、このようにまとめることができる。ヤスパースが当時の西洋における仏教研究の動向での、「大乘非仏説」自体を承知していたかどうかは不明である。しかし少なくとも「大乘仏教批判」には与しないだろうと考えられる。なぜなら『大哲学者たち』において「龍樹論」も収めているという事実からすれば明らかであろう。〈空性〉を説いて大乘仏教を大成した龍樹を「偉大な形而上学者」として認めている以上、ヤスパースが大乘仏教そのものを拒否

するととは考えられない。だから「仏陀の教え」と「大乘」仏教」とを区別している時点で先の中村の言う通り「大乘非仏説」傾向に通じるものの、「仏陀の教え」そのものでない思想としての「大乘仏教」を認める点では、「大乘非仏説」傾向に値しないと筆者は捉える。

註

- (1) Karl Jaspers, *Die großen Philosophen*, Piper, München, 1957.
- (2) 林淳、吉永進一、大谷栄一編『日文研叢書「ブッダの変貌——交錯する近代仏教』法蔵館二〇一四年七頁参照。
- (3) 前掲書、七頁。
- (4) 前掲書、七—八頁。
- (5) ヘルマン・ブツク著、渡辺照宏、渡辺重朗訳『仏教(下)』岩波文庫、一九七七年、「訳者のこぼし」一五八頁(渡辺照宏執筆)。
- (6) 『ブッダの変貌』八一—九頁参照。
- (7) Hermann Oldenberg, *Buddha : Sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde*, 6. Aufl., J. G. Cotta'sche Buchhandlung Nachfolger, Stuttgart und Berlin, 1914, S. 88.
- (8) 『ブッダの変貌』一〇—一一頁参照。
- (9) 前掲書、一一頁。
- (10) Hermann Beckh, *Buddhism : Buddha und seine Lehre I*, G. J. Göschen'sche Verlagsbuchhandlung G. m. b. H., Berlin und Leipzig, 1916, S. 23.
- (11) *ibid.*, S. 25.
- (12) *ibid.*, S. 80.
- (13) Friedlich Heiler, *Die buddhistische Versenkung—Eine Religionsgeschichtliche Untersuchung*, Ernst Reihardt, München, 1918.
- (14) *ibid.*, S. 58 : “Das Gebet im Mahayana-Buddhismus”, (大乘仏教における祈り)
- (15) Karl Jaspers, *Der philosophische Glaube*, Fischer Bucherei, KG, Frankfurt am Main und Hamburg, 1958, S. 14. 「信仰において自身の根差しつつの信仰と、自らつかみ取る信仰内容とは不可分である……信仰の主観面と客観面とは不可分の一つの全体をなしている」
- (16) Richard Pischel, *Leben und Lehre des Buddha*, B. G. Teubner, Leipzig, 1917.
- (17) *Die großen Philosophen*, S. 126, ff.
- (18) *ibid.*, S. 131, ff.
- (19) *ibid.*, S. 131. 「普通の意識において行われる哲学的思惟の真理も、瞑想において体験される経験の真理も、いずれも道徳的行為 (sitlicher Tun) において生活全体を浄化することと結びついている……いかなる知識内容にもならない包括者のうちにこの教えが編み込まれている」

- (20) *ibid.*, S. 133.
- (21) *ibid.*, S. 134ff. (括弧内筆者挿入)
- (22) *ibid.*, S. 142ff.
- (23) *ibid.*, S. 145ff.
- (24) *ibid.*, S. 150ff.
- (25) *Buddha : Sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde*, S. 359 ; *Die buddhistische Versenkung*, S. 8.
- (26) *Buddha : Sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde*, S. 86.
- (27) *ibid.*, S. 150f.
- (28) *Die großen Philosophen*, S. 126.
- (29) *ibid.*
- (30) *Buddha : Sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde*, S. 90.
- (31) *Die buddhistische Versenkung*, S. 48.
- (32) *Die großen Philosophen*, S. 133
- (33) Karl Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, Springer, Berlin, 1917.
- (34) ヤスパースは『精神病理学総論第四版』(一九四六)において既にハイラーの著作『仏教的沈潜』を参考文献に挙げている。
- (35) *Die großen Philosophen*, S. 146.
- (36) 中村元『龍樹』講談社学術文庫、二〇〇二年、七四頁。